

小峠愛宕神社の会式（清水区）

去る4月14日（日）、清水区小峠の愛宕神社において会式が行われました。小峠地区は、あらぎ島を新田開発した大庄屋の笠松左太夫が、新たに紙漉きを産業として発展させる中心的な村として開拓したことに由来する集落です。紙漉き村としての開発は、万治3年（1660年）ごろであったことが史料から判明しています。

愛宕神社は、集落東側の山中にあります。神社と集落の比高差は約140mあり、神社までは徒歩で約20分かかります。地区の言い伝えによると、かつて大火が発生して被害が出たために、京都の愛宕神社から勧請して防火の守護神として祀ったことが始まりとされています。

現在の会式は、旧暦3月3日に近い日曜日に開催さ



会式

れています。かつては、地区住民が総出で山を歩いて登り、餅まき会式を行い、神社近くの見晴らしの良い場所で莫塵を敷いて花見を楽しんだそうです。現在は、登山が可能な住民が神社まで登り、会式を行った後に集会所で餅をまくようになっていきます。

愛宕神社の社殿は、土台などの部材が腐り、倒壊の危険性が高まっていました。このため、重要文化的景観の保護制度を活用して修理が行われました。解体修理の結果、前回の修理は昭和38年（1963年）に実施されていること、社殿はクリやケヤキなど集落近くの木を多く使用し、小峠在住の大工が中心となって施工していたことが分かりました。地域に身近な木を多く使用していることは、この地域の歴史や特徴を物語るものであることから、今回の修理に際してもできる限り元の部材を再利用しながら修理を実施しました。地区住民の方々からは、「きれいになって良かった」という声が聞かれました。



修理前



修理後